

シカゴ大學附屬小學校

幼稚園と小學校との聯絡問題（二）

シカゴ教育大學助教授

アリス・テンブル女史述

豊子譯

一、聯絡に都合のよき狀態

シカゴ大學附屬小學校の學級は比較的小さい。幼年級の一組の兒童數は三十五人を越えない。音樂、圖畫、手工及體育のためにそれぐ専任教師があり、これらの授業のためには組をまだ二つにして、十八人又はそれ以下の人数としてその教育功果を大ならしめて居る。ある教室には、小さい集合室グルーフルームがついて居る。そして、體育運動のためには、運動場、體操場がある、また特に音樂室も仕事場もある。それ故に二組を同じ室に入れて、仕事をしなければならないといふやうな必要は決しておこらない。

室の椅子、こしかけなどは自由に持ち運びが出來適當な器具は勿論そなへてある。一年級の室に備へたつてくれたその先生である。その學級の日々の

てある器具は幼稚園の保育室におけるものと殆ど同じである。それ故に、幼稚園から大變かけはなれた所へ來た様な一年生の兒童も、全く、今迄の幼稚園に居つた様に思つて居る。その内でなされる活動もまた同じである。彼等は畫いたり、粘土細工をしたり、いろいろ積んで遊んだり、遊戲をしたり、お話を聽いたり、また自由談話をしたり、歌をうたつたりする。讀方教授の様な秩序的のものでも後にのべる様に、生徒は容易にうける事が出来る。更にその受持の先生がまた彼等には見知らぬ人ではない。先生は彼等が幼稚園に居る頃から、遊戲の時などいつも一緒になつて運んで呉れたその先生である。音樂の先生も亦、これまでよく幼稚園に來ては、一緒に歌を

時間割はもとより多少幼稚園よりも固定的にする必要はある、音楽とか手工、その他を特に教へるためには。けれども、一般の空氣は、實に自由な、形式にとらはれない、それこそ幼稚園に於ける如き、氣の抜けない、家庭的なものである。

四年級以下の五人の各級の教師は、すべて、小學校を教へる教養を有するゝもに、また、幼稚園保姆としての教養をうけて居る。同様に二人の幼稚園保姆も小學校を教へ得る資格がある。

學級の大きさが、いろいろにかはるために、小學校下級の先生方は毎年同じ學級をきまつて受持つといふことはしない。ある時には二年級の多人數の組を受持つが、また他の年には、一年級又は三年級——これららの級はつねに多人數の組である——を受持つことになる。もし詳しく云へば、一年A組及一年B組の教師が、ある學課を教へるために二年級又は三年級の午後の課程時間に招かれる——この時には一年級は出席しない——。或はまた、ある一年間を二年A組及三年B組を教へた先生は、翌年には二年B組及二年A組を受け持つといふ工合になつてゐる。多くの教師の中の一人は、三年間引續いて同じ級を

受持つ。すべての教師はお互に實際的に他の級の教室を參觀する。かかる經驗は、教師をして自分の受持つ級以外に上級及下級の學級の教科に直接に接觸せしめ、聯絡を保たしむる上に大なる便益がある。そして必ずまた、教科の主題及その方法の上に、學校生活の各方面の狀態の上に、一層の聯絡を得る助けとなるのである。また、音楽とか體操とかの専任教師は各級受持の教師と密接に調和を保ち、かくて一方、各級の程度を保ちつつ、他方、その相互聯絡は望まれるのである。

二、學課目

幼稚園と初等年級とを、實際生々と聯絡させ關係させようと思へばその最も有效なる方法は、先づ根本に於て學課目の統一的編制といふことにある。思ふ。事實上、この期の兒童の心理研究の結果はかかる方針を要求して居るのである。この期全體を通じて共通な、ある本質的の傾向及特性がある、學校はこれを考へねばならぬ。即ち、
一、この期の兒童は、きはめて模倣性に富んでゐる。また、たへずそのうける社會的のさまざまの經

验を模倣的に、演劇的遊戲にあらはして之を説明しやうとつとめる。

二、児童は何でも感覺に訴へたがる。これ故に、種々の材料を取り扱ひ、また道具——大工道具の様な——などをつかつて實際に經驗して見る事を喜ぶ、も機用になる事、自分達の遊びの考案に適當する様な物——もどより粗雑なものではあるけれども——をつくるようになる。かくの如く、ある物を工夫し、之をつくるといふことは、たしかに、初步ではあるが「問題を解く」といふはたらきを含んでゐるのである。

三、この期の児童は、非常に社交的であるといふことは、彼等が、如何に友達を求め、又如何に友達と遊ぶことを喜ぶかといふことでも、いかによく熱心に喋舌るかといふことでも、如何によく彼等の仲間のすることをしようとつとめるかといふことでも明らかにわかる。

四、最後に、児童は、その生活器官及筋肉を善良なる状態のもとに練習させるために、一種の生理的活動を要求するものである。

ドラマチックプレイ

キンダーカーテン、ファストグレード

幼稚園II 初等年級の學課目は、先づ考への第一歩として児童の上述のごとき基本的の必要及要求にしあがつて編制さるべきものである。児童の自發活動を助長し、その要求を満足せしむるために、或は種種の材料を供給し、或は、機會を與へるよう企て、又、種々の方面において児童の經驗をひろめ、自ら支配する力を生ずるようにするために、獎勵的な、必要な指導を與へるよう心掛くべきである。

幼稚園及初等學級を通じて繼續すべき活動の一一つの重要な様式を、簡略にあらはすといふことは、即ち學校生活の最初の二三年間に、児童の經驗が如何に連續して保たれたかといふことを説明するのに役立つのである。即ちその二つの活動とは、(一)戯曲的手工的の活動、(二)言語活動(話さうとする活動)といふ標題であらはし得ようと思ふ。遊戯、競技、音楽、繪き方などは、またこの同じ原理の中に編みこまれてしまふ。

「團體生活」といふことは通常多くの遊戲的興味を中心とするものをふくむ言葉として用ひられてゐる。

児童はある形式の社會的生活に入らうとねがふ、

即ち彼等の有する構成的及模倣的の遊戯に於て、社會生活の特に興味をひいた方面を模倣してあらはすことによくする。よく、都市の児童が、商店遊び、汽車ごっこ、駄者遊び、その他のまねごとをして居るのを見かける。彼等はかういふ遊びの際に、人形とか、その他の玩具を、實にたゞ彼等の欲する目的に、誠に手近に、たやすく使用してしまふ。椅子をならべて汽車にする。室の一隅においてある「ソファア」の後に出来た空間をすぐお家にする、などはよく見る事である。

三、いろいろの考案

幼稚園の保育者は、その出發點に於て、上に述べた様な強い戯曲的構成的の興味を實際につかつて行く様にすべきである。児童は、初めて學校に來た時に、その室には、澤山の面白そうな玩具とか、いろいろの遊具がおいてあるようとする。例へば、人形、人形の寝牀、人形の椅子、著物など。或は飯事道具、汽車、荷車、大きな牀上積木、粘土、紙鉢糊、畫の道具などをそろえて置く。子供等は、かゝる澤山の玩具、遊具の中から、自分に好きなものを選んで、自由勝

手に初めの五六日を過ごす。かうしてゐる間にやがて彼等はいろいろの材料を取扱ふ事が出來、またその能力の程度もわかる様になると、此處で教師は、彼等の自發的に始める遊びに指導を與へる事により、又、巧みに暗示を與へる事によつて、次第に、その活動をその全團體の教育案の形式にかなつて組織され限定されて行くよう導いて行く。例へばこゝに幾人かの子供が大きな牀上積木を持ち出して、牀の上で遊ぶ事に非常に興味をもつたとする。一日二日の間、彼等は積木でいろいろのことをして見る。遂にその中の一人が椅子をつくつた。この事がこの子にも、また他の子にも椅子より他の家具をつくらうといふ暗示となり、やがて彼等は皆椅子、テーブル、寢臺、ストーブなどをつくる。しかもそれは子供等がつかへる程の大きさのものである。

やがて彼等は、お互に他の領土を侵略し始めてここに場所争ひがおこる。この時、先生は、牀上に白墨で線をひいて、一人ごとに子との場所の界をたてる。そうすると、これが彼等に「室」といふ事の暗示を与へる。かうして今仕切つた場所は、となりあはせに次々にならんので、「これは一軒の家にい

ろくの室が幾つもある」といふ暗示を與へる。そこでどの室が必要で、どの室にはどんな道具をおけばよいといふことで、一しきり議論がおこり、そしてまた、たちどころに、相當な家具をそなへたいろくの室が出来上る。ある子供は室の區切をあらはすに牀の上にひかれた白墨の線だけでは満足出来ず、更に、これを安定にするために、長い積木をならべる。すると隣の室の子が、「入口がいる」といひ出す。そこで先の子供は、短かい積木にどりかへて入口をあける工夫をする。

この「まゝごと遊び」に於て、演劇的の遊戯は臺所とか、食堂とかいふものに興味づけられて、そこでお料理道具がほしくなる。この時、先生は新しい粘土やまた嘗つて児童がつくつた粘土細工の道具などを與へると、彼等は大よろこびで、その場合に應じて、薬罐とか土瓶とか、コップとか、皿とか、好きなものをつくる。ふと一人の男の子が、女の子に向つて、「僕ね、あなたの鍋の中に豆を入れてあげやう、煮て下さいね」といひながら粘土をちぎつて小さくまるめ始める。先生はこの機會を捉へて、「お料理するのにつかふものは何處からこつていらつしやるの?」と

いふやうな暗示を與へる、すると彼等は八百屋を思ひつく。二人の男の子がこの店をつくらうと著手はじめめる。外の子等はいろくとその出来ばえを議論する、あれこれと皆が意見を言ひあつて、やがて立派な店が出来る。出来上つた可愛い店には粘土でつくつた果物や野菜がならべられる。ならべて見るに、八百屋にはあれもおかねばならぬ、これも賣りたいといふので店がせまくなる、そこで彼等はありつけの積木を皆つかつて大きな店をつくらうといふ相談をまとめてやり出す。

このやうに、ある児童がその計畫を次々にと實行して行く間に、また他の一組の児童は、先生から頂いた、紙細工の家でやはり「まゝごと遊び」をしてゐる。こちらは初めは積木をつかつて家具などをつくつてゐるが、やがて八百屋遊びがおもしろくなつて来る。そこで先に八百屋をつくり始めた仲間と聯合して、此處に大きな建物をたて、兩方から持ちよつて澤山の商品をならべることになる。かくてこの計畫は、やがて、商品の仕入れとか、店頭の陳列とか、賣り買ひの方法などといふ内部の手配が大切であるといふ所まで發展して行く。そこで、僕は仕

番頭「さやうなら」

入れる人になるとか私は賣り手になるとかそれぐにその手腕にしたがつて自分の役目をきめる。品物を入れるために大きさのいろいろな箱や袋がいる。罐や瓶のやうなものも工夫される。粘土製の果物や野菜もそれぐよくわかる様な特長ある形につくり又著色もする。値段をかく札がいるのでそのために大きもそれぐに考へて紙片を切つておかねばならぬ。買物籠や、運ぶための車もつくられる。そしてまた、買ひ手のためにはおもぢやの金錢や紙入もつくられる。

かくて用意萬端ごゝのふと、こゝに「賣買ごつこ」が始まる。紙細工の家からは、お母さんが手に紙入をもつて出かけて来る。番頭さんは帳場にすはつて客の應待をする。時にはまた電話で注文が來る。かうしてしばらく遊んだ後、彼等は次の様な對話の歌をよろこんで歌ふ。

母「もしもし、どうぞ、下さいな、

番頭「はい／＼、あげます。おどけします、

一時間内におどけします。」

母「さやうなら」

花壇に植物を植えこれを世話をすることや、雑をそだてるなどは、自然を経験させる上に大切なことである。

この外に、子供がめい／＼に紙入形をつくつて、これを中心としていろいろの遊びをする。例へばクリスマス祭をしやうとして、クリスマスツリーの裝飾やら、客間の工夫やら、贈物のこと、招待のことをいろいろ考へ、更に今度は家を幾軒もつくつて、こゝに團體生活を實現し、此處は教會、此處は學校、此處は商店此處は消防隊など、區別する。かくて彼等の遊びは次第に進んで行くのである。かうして行く中に子供は、またすぐに市街のいろいろの設備といふ事に氣がつい、人道車道の區別やら、街燈の事にまで暗示されて行くようになる。かうして一方に彼等は日常生活の豊富な刺戟に加へて、遠足をしたり繪畫を見たり、説明をきいたりして、彼等の知識は日々に増すごゝもに、他方には多様な演劇的活動やいちゞるしい構成の能力によつて、彼等はいつもその興味のある所をあらはす機會を與へられるのである。

としてこれがまた計画されてゐる。

上述の様な遊戯活動によつて、彼等はたゞ新しい觀念、新しい意味を獲得し、またその得た觀念を彼等の遊びの目的の方にもつて行くその力が、發展して來る。この、觀念支配の發達とともに、言葉の發表といふことが觀念發表の具として平行して進んで行くといふことが大切である。比較的多くの觀念の獲得と、それら觀念に相當する言葉を知るといふことは、知的に、「読み方」を學習するその方法の端緒である。

子供が印刷された言葉と、それに關する意味を學ぶ場合には、先づもつて、その相當する言葉の發表即ちその言葉の響をその意味と結びつけねばならぬ。初め、子供は、印刷された符號からその意味を知るといふことになるには、たゞ口でいつて示すといふ方法によつてのみ出來るので、それ故に、幼稚園では、かかる種類の經驗を充分に與へ得る様に用意する事が大切である。もし子供が、かかる經驗をつままずに、小學校の一年生になると、學校の方では、読み方を有效に教へることのまへに、先づ上述の經驗

を充たすために時をとらねばならぬこととなる。

小學校一年級では、このいろいろの遊びの計畫は、たゞ幾分團體生活的的形式をとつて一層手練巧みになされる。幼稚園を通つて來た兒童は一年もまへにしてゐたまゝごと遊び、商賣ごっこ、などを思ひ出し、或は夏に遊んだ田舎や農家の經驗などをくりかへして遊びの中にあらはすこと興味をもつのである。學校園内に產する食物のことを見らせれば、彼等の興味は、たやすく田園生活とその家族的なそして共同的生活の特長を面白くおもふようになる。やがて、彼等は、砂場に、牀上に農場を模造し、いろいろの建物、それぐの花園、田畠、垣根などをつくる事に趣向をこらす。また必要な動物は玩具をもつて來てならべたり、粘土でつくつたりする。

○自由遊戯と自由作業の時

上述の様な様式の作業とともに、また一層自發的な又目的ある活動をさせるために、小學校の教師等は、ある準備をしてやらなければならぬといふことを感じて居る。即ち幼稚園におけるごとく、全然兒

童の自由選擇にまかすべき種々の材料をそなへ、その活動も、その考案も、實に彼等の思ひのまゝにさせてやるようになると苦心する必要がある。それ故に、時間割のごときもそのつもりでつくつて一週間の中で児童が、玩具やその他の材料を自由勝手に用ひ得る時即ち自由作業とも云ふべき時となるべく多く與へる様にするのである。この自由作業の材料としては、紙細工の材料、書き方、書き方の材料、粘土、木片及大工道具、裁縫道具、人形、繪、お話の本などが主なものである。

児童は、めい／＼必要なものを出して遊び、後始末はまた、すばやく自分でする或時は一人で一心にしてをることもあり、又は小さな紐になつてすることもある。この時に先生は必要に應じて助けてやり、又は暗示を與へてやる。また、氣力の少ない子供は之をはげまして、何にもせずにぼんやりとすごしてしまふことのない様に氣をつける。それからまた、一人一人の子供同士また組をつくつてゐれば、その組ごとの組ごとにその仕事を語りあつて、互に他から多くの暗示をうける様な時間をこしらへる。この時間こそ、先生に一番大事な時で、児童の興味と

その能力を深く洞察し、一人一人の異なつたその個性にもとづいて一層考へぶかく用意するといふことをこれによつて出来るのである。また、彼等の獨創的な、他にたよらない考へ、その活動などを一層發展せしむるために有效な方法を得るにも大切である。且、亦、この自由作業とその自由の度に従つて社會的制裁といふこともわからせることが出来る。（未完）

○日本幼稚園協會夏期講習會

本會主催のもとに今夏、文部省保育講習會開催の期間中、凡そ一週間土川五郎氏の「律動遊戯及表情遊戯」の講習を致します。御希望の方は當日迄に本會宛御申込み下さい。
(但し會費金壹圓。開會當日御持參の事)